

「内山完造の自筆文書について (2)」

内 山 籬

内山完造研究会では内山完造が敗戦前後上海で書いた「日記」や「雑記」と書かれた自筆のノート4冊(1944年6月5日～1946年10月5日)を読み、活字にしてきた。筆者は「内山完造の自筆文書について」「上海内山書店の結末」二篇においてこれら4冊のノートについて紹介してきた(人文学研究所報64号, 65号)。

内山完造はこれらとは別に原稿用紙に書いた文章(1945年9月4日～1947年5月5日)約550枚を「上海で書いた原稿」と記し、東京内山書店あてに送っていた。

二つに分けて送られてきたその書類封筒は——今回私たちが開くまで手つかずだったようで——風化してボロボロになっており、中身を取り出す際にも破損を免れず、送られてきた日時を知るすべもない。

これら「上海で書いた原稿」(以下「原稿」と記す)は四百字詰め、二百字詰めを取り混ぜた幾種類もの原稿用紙に書かれ一篇ごとに虫ピンで綴じてあったが、綴じられていない数枚はいずれも文章の断片で、どの原稿につながるか不明のままである。

「原稿」は前記4冊のノート(以下「ノート」と記す)と多くの部分で書かれた時期が重なっており、文末に日付を記載している点は「ノート」と同様であるが、大きな違いはタイトルにつづけて「内山完造」と署名していることである。この署名により「原稿」は雑誌等への掲載を意図して書かれたのではないかと推測する。ただ実際に発表されたかについては、「故国を思ふ」(1946年4月24日)一篇について『『改造』6月号』との記載があるが、その頃発行された『改造』に内山完造の文章は見当たらない。日本の政治に対する批判が過激だと見なされて、掲載を見送られたのか。

書かれた内容から比較すると、「ノート」と時期がほぼ重なっているが同一の文はなく、また文章の筆致も「ノート」とあまり変わらないようで、どのような基準で「原稿」と「ノート」を書き分けていたのかははっきりしない。書くためのノートが手元になかったからなのか。

さて550枚ほどの「原稿」をそれぞれの末尾に記された日付をもとに時系列にならべてみると、1945年が9月から12月までの5編、1946年は70編で最も多く、1月から12月(3月を除く)までまんべんなくあり、1947年は3月から5月までの10編であった。

その主な内容をおおまかに以下のように分けてみる。(日付、タイトルのないものも含む)

1. 敗戦後二年間の上海の日本人社会

1945年8月11日頃日本の無条件降伏が上海に知らされ、南京路は嵐のような大騒ぎになる。完造たちを乗せた三輪車の車夫がそれを見て「彼等は無智であるから騒いで居るのです。必ずこの次に来るものは中国の問題です。一塊牛肉一塊猪肉と分け取りされるに決まって居る。」と冷静に批判する言葉を聞き、「私は深い反省をさせられた。心からなる懺悔が湧いて来た。……この戦争によって犠牲になった多くの人々、不幸になった多くの人々に対して、特に中国の人々に対して私は日本国民の一人として心のどん底からお詫びを申上げるものである(「苦杯に直面して」日付なし)。「国軍歓迎、抗戦勝利」などの貼紙や「祝賀準備のアーチ」、街角の両替屋が銀行紙幣を

「並べて商売繁盛している」様子を目にし、日本企業に雇われていた中国人の「退職金や解散金で多くの悲喜劇が至る処に生じて居る」ことを知って、「蔣主席の声明が徹底して流血を見る様なことの無い様にと私は今から祈って居る」（「浮世ばなし」1945/9/4）。その退職金問題は自身の内山書店にも降りかかってくる（「蒸し返し」1945/9/22）。敗戦国民としては「中国人と対等の権利は全く無くなったのであり」、「中国軍湯恩伯將軍の命令に絶対服従することになった」結果、「民間人によって命令伝達善処機関を造れとのこと」で完造自身を含む15人がその委員になる（「新発足」1945/9/25）。その後、在留日本人を管理する中国側の組織とその指揮を受ける日本側組織の度重なる変更に、自身を含めて右往左往する様子を記している（「自治会及代表委員会への希望」1946/2/9、「自治会から互助会へ」日付なし1946/9～10頃、「好経験」1946/11/5、「相当非民主的な頭だ」1947/4/8）。

2. 今後日本の進むべき方向

日本の敗戦の原因のひとつは従来の政治や教育が「不真面目」であり、平和を看板にして侵略をおこない、文治友好を看板にしながら尚武偏重の教育をおこなってきたことである。「満洲事変以来十余年に渡る大戦争に当って、内心如何に反対して居たとしても現実に反対を唱へ得なかったならば、仮へどんな事情と条件があったとしても対外的には吾々はその連帯責任はまぬかれないものであると私は思ひます」（「時局偶感」1945/11/19—上海在留日本人教員達への講演原稿か）。無条件降伏であるから「我が日本はこの時にモウ軍備をする必要は頭から無いのである。タバー一足お先にと平和に向って突進すればよいのである。……吾々は戦勝国より一足お先に進んで居るのである」と考えれば「自らに勇氣は百倍するのである」（「路はタバー筋だ」1945/11/11）。しかし日本はアメリカによって食糧の救済をうけ、工業材料を提供されて製造するが、「製品の輸出となるとこれは全部アメリカ商人の一手輸出となるのである。これがつまり日本の死命を制するものであるのだ。日本は已にアメリカの殖民地として取り扱はれて居るのである」（「憂ひ百倍す」1946/4/18）。一方、YMCAの慰問団に参加して上海の捕虜収容所を訪問した完造は、桂林あたりから徒歩で上海へたどりついた兵士たちの顔色と服装を見て衝撃を受け、日本の民主化は「復員兵士からであらう」と、それも大多数の下級兵士であろうと直感する。日本国内では総選挙がおこなわれたが、海外から復員する兵士や帰国者を無視して総選挙を実行したことに疑問を呈し、「改選された当選代議士の色分けを見て」ガッカリし、「何が民主だ何が新日本だと思はず机を打って憤慨さへしたのである。」と書く（「故国を思ふ」1946/4/24）。その総選挙では非民主的な代議士が多く当選していると指摘し、長年にわたって植え付けられた軍国主義、帝国主義、侵略主義の払拭は一朝一夕にはできず、日本の民主化は遙か彼方にあるとする。「然しながら仮へ如何に遠き彼方にあるとも、日本は民主化するにあらざれば、自由と平和の民族になるにあらざれば、再び起つことは出来ないのである」（「三省の要」1946/5/7）と説く。

3. 政治・経済・外交についての観察

日本に勝利した中国では国共軍の衝突が顕在化し、米国や英国が中に立って協商が成立したと書く（「内戦の停止」1946/1/17および「かすがい」1946/2/16）。1931年9月18日いわゆる満洲事変から1937年7月7日盧溝橋事件を経て全面戦争への歴史をたどる。「ここで丁度日本は中国の手に乗ったのである。ここまでの色々の事件は悉くこの不拡大方針を放棄させるべく行はれて居ったものである（「中日事変の経過」1946/5/1）。他に「通貨戦争は尚進行中だ」（1946/5/2）、「的中した三つ」（1946/1/26）など。

4. 読書、講演などの感想

「原稿」のタイトルのなかでは本を読んでの感想が最も多い。『新生少年』という雑誌に掲載された志賀直哉の「清兵衛と瓢箪」は子供にわかりづらいと記す（「読後の感」1946/1/17）。唐詩を

数首読み、よく似た感じを与える日本の詩と比較する「思い出づるまゝに」(1946/5/10)。関屋正彦牧師の講演で、中国側の機関に留置されている日本人に対し、監守や巡捕が寛大で虐待や乱暴をしないことを聴き「目頭が熱くなった」と書く「人の心の情け」(1946/6/2)。

5. 在留日本人の子供達へのお話（上海童話会？）

いずれも子供たちに童話を聞かせるような書き方である。「ファール」(1946/5/11)、「クリスマスプレゼント『四枚の歯』」(1946/12/2)、「ソロモン王と二人の女」(1946/12/3)、「モンテスキューの逸事」(1946/12/3) など。

6. その他

長崎のお九日（おくんち）祭りで、蛇踊りを中国人でなく日本人が踊る理由について推理する「敢へて質す」(1946/11/20) や、中国の水は濁っていると言われるが、山西省の趵突泉など日本の水に引けを取らない清水があると指摘する（「天下第一泉」1946/11/20）など日本と中国の自然、文化を比較する。また、日本の食糧難を緩和するために中国から植物を輸出してはどうかと説く（「西瓜皮」, 「蕨と薇」, 「桔梗根」いずれも 1947/4/29）。

次ページ以降の文章は、内山完造研究会のメンバーで読み合わせした内山完造手書きの「上海で書いた原稿」を整理、活字にしたものである。『人文学研究所報』64号、65号掲載の「内山完造雑記」（上記「ノート」）と合わせると、内山完造が1944年6月から1947年5月まで、敗戦前後約三年間の激動、混乱の中に身を置き、感じ、考えたことを記した（未公表の）文章をはほぼ全て見ることができる。それにより戦争末期から敗戦直後までの完造の戦争に対する考え方の変化、戦後日本の進むべき道についての思索など、後にその身を日中友好運動へと投じてゆく内山完造の全体像に近づくことができるのではないだろうか。